

和久寺の瓦

大槻眞純

1. はじめに

京都府福知山市宇和久寺の地では、古くより古瓦が数多く採集されており、さらに寺院推定地のほぼ中央部に位置する産土神鹿島神社の境内には、塔の礎石と考えられる石材が散在していることから、古代には大伽藍を有する寺院が建立されていたと伝えられてきた。^(注1)

文献的には和久寺の存在を明らかにする資料は残っていないが、和久氏あるいは和久郷といった人名・地名についてはわずかながら資料を残している。たとえば『日本国史資料叢書・丹波丹後』には、茶臼山城(和久城)の条に「和久氏、和久勝より出で、和久勝は貞観二年二月紀に正六位上和久勝清子あり、外従五位下を賜う本郷、和久郷より出で、又、和久氏、在原氏族とも云う」とあり、また、現在「和久」の地名を残しているのは兵庫県揖保郡、茨城県久慈郡、京都府福知山市だけであるが、『和名抄』には丹波国天田郡、すなわち京都府福知山市にしか「和久郷」という地名を残していない。このことから和久氏あるいは和久郷といった人名・地名と和久寺は密接な関係を持っていたと言えよう。

和久寺跡の一連の発掘調査は、福知山市教育委員会により昭和57年度より3カ年に亘って実施された。第1次調査^(注2)では塔跡および寺院建立の際の整地層を、また、第2次調査^(注3)では寺院の範囲を区画する築地跡および金堂の一部を、さらに、第3次調査^(注4)では僧房跡・回廊跡・工房跡・井戸跡等を検出するに至った。これらの遺構はそれぞれの間規則性が見られた。それは1尺を30cmとする単位をもって伽藍配置が成されていることである。たとえば塔跡の東西軸線は北方築地跡の中軸線から270尺、また塔跡の南北軸線は西方築地跡の中軸線から66尺、さらに柱穴の間隔がすべて30cmの倍数で形成されていることなどを見ても一定の規則があったことがわかる。このようなことから和久寺は、ほぼ一丁四方を範囲とする寺院であったことが推定されるようになった。ただ地形が急であり、また後世にかなりの削平を受けているため、その他の施設についてはまったくその姿をとどめていなかった。

以上のような諸遺構に伴い、数多くの瓦類・土器類が出土しており、その製作年代から和久寺の創建は奈良時代前半頃であることが判明した。

本稿では、出土した遺物のうち特に瓦類を中心に紹介し、またその造作等について若干の考察を加えてみたい。

2. 和久寺の瓦

現在までに確認されている和久寺の瓦には、軒瓦・平瓦・丸瓦・鬩斗瓦がある。軒瓦は軒丸瓦と軒平瓦とに分かれ、軒丸瓦にはWM・軒平瓦にはWHと記号を付し、それに瓦当文様を確認した順に01・02・03とした。さらに文様構成が同じでも範型の異なるものについては番号の次にA・Bと付号をつけて細分した。また平瓦および丸瓦については、それぞれのタイプにI・II・III……と数字を付した。その結果、軒丸瓦は3型式5タイプ、軒平瓦は1型式2タイプ、平瓦は6タイプ、丸瓦は3タイプに分類することができた。

A 軒丸瓦

(1) WM01系(複弁八葉蓮華文軒丸瓦)

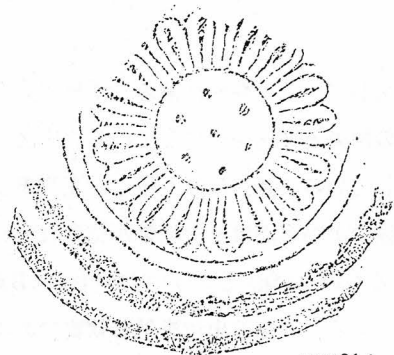
中房はやや大型で7個の蓮子を1+6に配している。蓮弁は細長く作り、間弁はくさび形に作っている。内区・外区は2重の圏線で区分し、圏線は直立で面鋸歯文を施している。瓦当は薄く、丸瓦との接点は最上部で、補強粘土は少量である。瓦当外周は横ケズリで、瓦当裏面はケズリとナデで整形されている。範に対して瓦当面が大きいことから、周縁外方へのはみ出し部分が大きいもの(A類)と圏線がやや高く周縁外方へのはみ出しがなく、周縁の端部をヘラによって整形しているもの(B類)がある。この系式の瓦はすべて灰色を呈し堅緻である。

WM01系は平城6225系と同系列を成す。両者を比較すると外区外縁がWH01系は凹面鋸歯文であるのに対し、6225系は凸面鋸歯文である。さらに中房の蓮子数がWH01系は1+6であるのに対し、6225系は1+8である点が異なる。時期的にどちらが先行する型式であるか定かではないが、WH01系の方が6225系よりも古いとする説もある。^(注5)

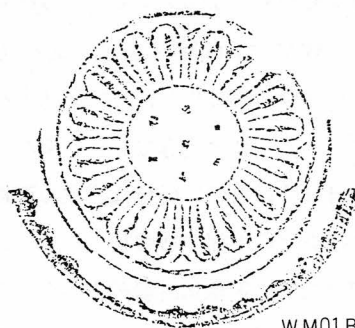
(2) WM02系(単弁八葉蓮華文軒丸瓦)

中房は低く小型で15個の蓮子を1+6+8に配している。蓮弁は大きく広がり、一葉ごとに輪郭をつけて明確にしている。弁先はわずかに反転している。内区・外区は2重の圏線で区画し、周縁はやや外反している。周縁の上面には両端に1条ずつの同心円を配し、その間に16個の珠文と4条の放射文を交互に配している。瓦当は厚く、丸瓦との接点には補強粘土を多く使用している。瓦当外周および裏面はナデ調整が施されている。この系式の瓦はすべて褐色を呈しており、焼成温度はかなり低いものと考えられる。

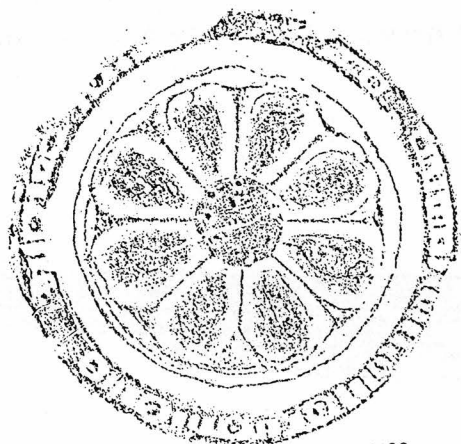
WM02は山田寺式第3群に該当する形式のものであるが、周縁に同心円・珠文・放射文を配する独特な文様構成をもっている。このような瓦は京都府内では深泥池御用谷窯跡・



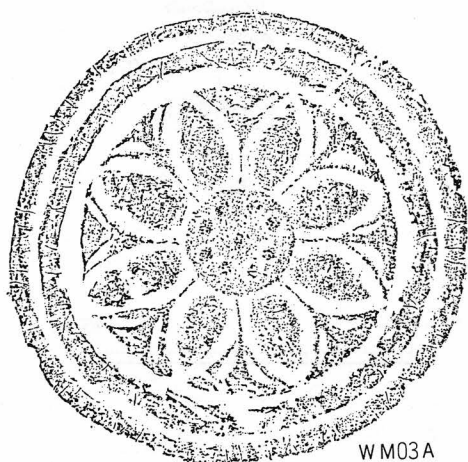
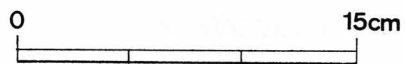
WM01A



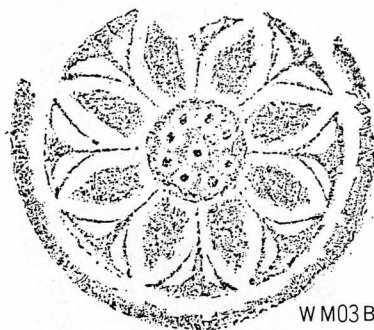
WM01B



WM02



WM03A



WM03B

第1図 軒丸瓦拓影

北野廃寺から、また兵庫県内では河合廃寺・立脇廃寺・葉琳寺等から出土している。

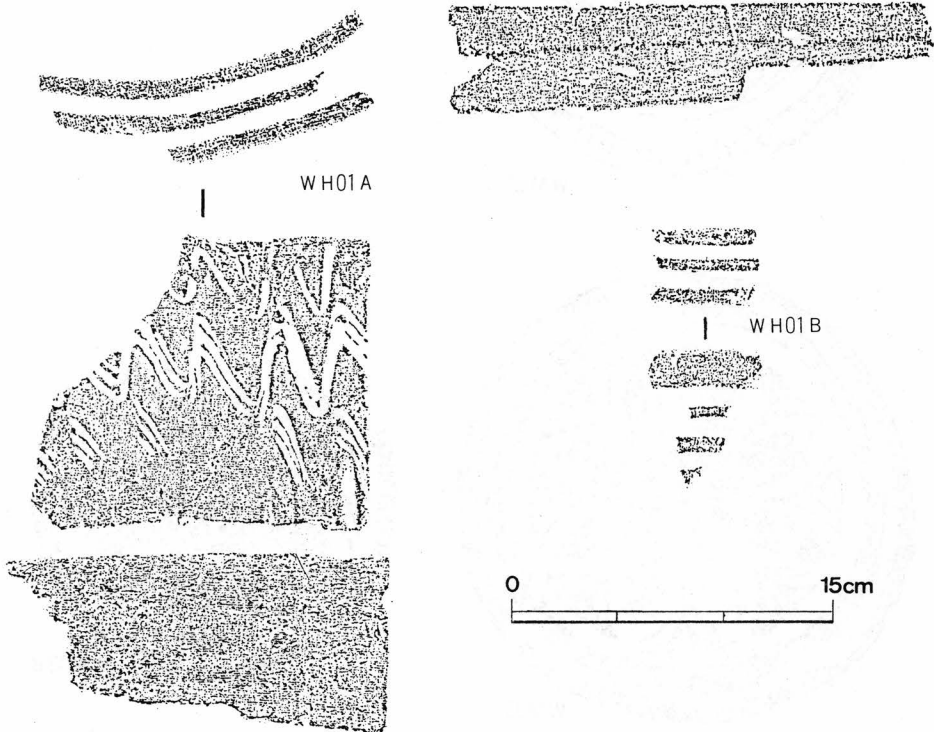
(3) WM03系(単弁八葉蓮華文軒丸瓦)

中房はやや張り出し、9個の蓮子を1+8に配している。蓮弁は輪郭をつけて大きくみせている。間弁は大きなくさび型を呈し、蓮弁の輪郭と文様を一にしている。内区・外区の境目は特にない。周縁は直立し面鋸歯文を施している。瓦当は厚く作り、瓦当裏面と丸瓦の接点は最上部で補強粘土は少ない。瓦当外縁および裏面はナデ調整が施されている。WM01系式と同様に外縁外方へのはみ出しがあるもの(A類)とそうでないもの(B類)がある。瓦当自体の凹凸は少なく、全体に平坦である。A類は黒色を呈し軟質であるが、B類は青灰色を呈し、堅緻である。

WM03系の周縁に施されている鋸歯文は明確な鋸歯を呈しておらず、不揃いで等間隔でもない、むしろへらでくさび状にきざみを入れた様相を呈していることから、他に名称を付すことが妥当かもしれない。

B 軒平瓦

WH01系(三重弧文軒平瓦)



第2図 軒平瓦拓影

平瓦に顎を貼りつけ、面取りした後に型引きにより、深く曲線的な文様が施されている。顎の幅は広く、ヘラ描きの波状文が施されているもの(A類)と弧文状の段を有するもの(B類)に分けることができる。A類の焼成はWM03系のA類に近く黒色を呈しているものとWM01系とWM03系のB類に近く青灰色を呈しているものがある。B類のそれはWM02系に近く赤褐色ないしは褐色を呈している。いずれも凸面がヘラにより調整されているが、凹面には布目が残る。

WH01系のA類は兵庫県の立脇廃寺で、B類は京都府の平川廃寺で同種の顎を持つものが出土している。なお、和久寺跡の軒平瓦は、WH01系しか検出されていない。

表1 軒丸瓦点数表

年度 型式	年度				合計
	57年度以前	57年度	58年度	59年度	
WM 01 A	—	7	7	2	16
01 B	3	5	3	1	12
02	1	6	—	2	9
03 A	—	8	4	3	15
03 B	—	5	1	2	8
合計	4	31	15	10	60

表2 軒平瓦点数表

年度 型式	年度				合計
	57年度以前	57年度	58年度	59年度	
WH 01 A	2	17	8	5	32
01 B	—	2	—	1	3
合計	2	19	8	6	35

表3 軒丸瓦計測表 (*は推定値)

型式番号	直径	内 区					外 区					
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	広さ	内 縁		外 縁		
								幅	文様	幅	高	文様
WM 01 A	177	49	1+6	109	34	F8	23	11	K	12	6	RV30
01 B	156	48	1+6	108	34	F8	24	11	K	13	9	RV30
02	191	43	1+6+8*	117	24	T8	36	14	K	14	10	S16
03 A	185	47	1+8	130	24	T8	14	4	—	10	5	RV
03 B	160	45	1+8	133	22	T8	12	5	—	7	9	RV

C 平瓦・丸瓦

平瓦は6タイプが出土している。いずれも凸面叩目文が格子を基調とするものである。Ⅰ類は一辺6mm程度の菱格子から成り、全体の43%を占める。Ⅱ類は一辺7mm程度の斜格子から成り、全体の12%を占める。Ⅲ類は一辺4mm程度の正格子から成り全体の13%を占める。Ⅳ類は一辺10mm程度の菱格子から成り全体の2%を占める。Ⅴ類は一辺16mm程度の斜格子から成り、全体の21%を占める。Ⅵ類は一辺2mm程度の正格子であり全体の9%を占める。Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ類は面取りが施されており、凸面叩目文の1/2~1/4程度をヘラにより調整している。Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ類は面取りもされず、造作全体が粗雑である。いずれも凹面に布目を残している。

これらの平瓦でWH01系に伴うものはⅤ類であり、WH02系に伴うものはⅡ・Ⅲ・Ⅵ類である。さらにⅠ・Ⅳ類はWH03系に伴う。

丸瓦は3タイプ出土しており、いずれも行基式に属する。3タイプとも凹面には布目を残すが、凸面はていねいにヘラ削りが施されているもの(Ⅰ類)、ヘラとナデにより整形されているもの(Ⅱ類)、主としてナデにより整形が施されているもの(Ⅲ類)に分けることができる。この3タイプの丸瓦はⅠ類がWM01系、Ⅱ類がWM03系、Ⅲ類がWM02系の焼成、色調に酷似していることから、それぞれのタイプは軒瓦・平瓦と共に瓦の生産地を決める手がかりとなるものと思われる。

3. おわりに

以上、和久寺跡出土の瓦の概要を述べてきたところであるが、最後に若干の考察を概括し、問題点を提起してまとめとしたい。

①和久寺跡出土瓦のなかで、最も特徴のあるものはWM02系式である。この型式は山田寺式第3群に該当する型式であるが、周縁に珠文・放射文を交互「・|||」に配する独特な文様構成をもっている。同じ山田寺式に属するもので深泥池瓦屋御用谷窯跡や北野廃寺出土瓦でも「・++」・「・--」の文様が同様に施されているが、これらの文様はどのような関係をもつのであろうか。木村捷三郎氏は工人の移動説を掲げられている。^(注6)蓮弁の造作等については、それぞれ違いがあるものの、一種の近縁関係の現れとして氏の説に同意したい。しかし、深泥池瓦屋御用谷窯跡や北野廃寺出土瓦に比べ、WM02系は文様や造作が雑である点が気にかかる。なお、新たに兵庫県朝来郡朝来町の立脇廃寺出土瓦^(注7)も、小破片であるものの同様の系統を持つものであろう。ただ、豊岡市三宅の薬琳寺跡出土瓦は周縁に「・|□|」の文様を持つものの、時代がかなりさがるものと考えられる。

このことについては工人移動説もさることながら、今後十分に検討していかなければならない。

②和久寺跡出土瓦の製作順序については、WM02系が最も早く、次いでWM03系が、最後にWM01系が製作されたものと考えられる。それはWM02系が文様の的に最も古い要素を持ち、WM03系は、それを簡略化して製作されたものであろう。そして周縁外方へのはみ出しは、軒を葺く際のバランスを考慮し、WM02系と同じ程度の直径とし、つづくWM01系も同じ意図で製作されたものであろう。WM01系のB型式・03系のB型式については、A型式と同一の範を利用して製作された修復瓦だと考えられる。

③WH01系は前にも述べたように2型式に分けられ、A類の類には波状文が、B類の類には弧状の段が描かれている。ただA類は焼成と大きさから2タイプに分けられる。それはWM01系およびWM03系B類とセット関係を成すものとWM03系A類とセット関係を成すものである。B類は、WM02系とセット関係を成し、和久寺跡出土瓦の中では最も古式のものである。

④平・丸瓦の分類は、充分とは言えないが、平瓦6タイプ、丸瓦3タイプに分けることができた。丸瓦については、まだまだ問題は残されているが、一応、軒瓦と対照できる群としての分類ができた。分類の基準となったのは、胎土・焼成・色調・仕上げの段階での調整であるが、平瓦については、凸面の叩目文も分類の手段とした。ここで問題としたいのは、同じタイプの瓦でも細部の造作にかなり違いがある点である。このことは、瓦工人組織内における分業体制が十分に確立されていなかったことに原因があるのかもしれない。

⑤WM01系は平城6225系と同系列を成す点については先にも述べたとおりであるが、もし、WM01系の方が古いとするならば、和久寺の瓦を製作した瓦工人が移動したと考えるべきであろうか、もしくは、近縁関係の工人が移動したと考えるべきであろうか、さらには、まったく別の瓦工人によるものであろうか、今のところ何とも判断し難い。

⑥平瓦凸面の叩目文は多種におよぶが、このうちI類は特徴的なものである。II・III・VI類については、奈良時代前期の寺院出土のものとしてしばしば見受けられ、またIV・V類も摂津伊丹廃寺等で出土している。しかしI類については類例がなく、今のところ

和久寺独自の文様と言えよう。なお、出土した鬘斗瓦はすべてI類を縦に半切したものである。

和久寺跡出土の瓦類については以上のような事が考えられるが、問題点も多々ある。しかし、当時の歴史背景がまったくと言ってよいほど明らかではなく、また関連する資料が乏しい現時点では消極的な事実報告しか提供できず、具体的な論証をするまでに至らない。今後、生産地等について追究していかねばならないが、このことについては関連する資料の増加を待ち、改めて検討したい。

(大槻眞純=福知山市教育委員会社会教育課主事・元当センター職員)

- 注1 京都府「下豊富村字和久寺廃寺礎石及び出土古瓦」『京都府史蹟勝地調査會報告 第8冊』1927
福知山史談会「和久寺出土の秋草双雀鏡について」『ふくち山 123号』1962
- 注2 福知山市教育委員会『和久寺跡第1次発掘調査概報』1983
- 注3 福知山市教育委員会『和久寺跡第2次発掘調査概報』1984
- 注4 福知山市教育委員会『和久寺跡』1985
- 注5 奈良国立文化財研究所上原真人氏の御教示による。
- 注6 京都市埋蔵文化財調査センター『ケシ山窯跡群発掘調査概要報告』1985
- 注7 兵庫県朝来郡広域行政事務組合田畑 基氏の御教示による。